

9/12 Mon.

非破壊検査 Presents 第33回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.33, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

9/14 Wed.

第655回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.655 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

レズニチェク
REZNICEK

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

辻井伸行 -p.8
NOBUYUKI TSUJII

長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈ドンナ・ディアナ〉序曲 [約5分] -p.13
"Donna Diana" Overture

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37 [約34分] -p.14
Piano Concerto No. 3 in C minor, op. 37
I. Allegro con brio
II. Largo
III. Rondo: Allegro

交響詩〈英雄の生涯〉作品40 [約45分] -p.15
Ein Heldenleben, op. 40
I. 英雄 - II. 英雄の敵 - III. 英雄の伴侶 - IV. 英雄の戦い -
V. 英雄の業績 - VI. 英雄の引退と完成

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：非破壊検査株式会社 (9/12)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 (9/14)
協力：コジマ・コンサートマネジメント (9/12)

※9/12《大阪定期演奏会》では読売テレビによる収録が行われます。

9/20 Tue.

第621回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.621 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ソプラノ
Soprano
バリトン
Baritone
合唱
Chorus
合唱指揮
Chorusmaster
コンサートマスター
Concertmaster

ダニエル・シュニーダー
DANIEL SCHNYDER

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

ファン・スミ -p.8
SUMI HWANG

大西宇宙 -p.9
TAKAOKI ONISHI

新国立劇場合唱団 -p.9
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

富平恭平 -p.10
KYOHEI TOMIHIRA

長原幸太
KOTA NAGAHARA

聖ヨハネの黙示録 (日本初演) [約30分] -p.17
The Revelation of St. John (Japan premiere)

ドイツ・レクイエム 作品45 [約68分] -p.18
Ein Deutsches Requiem, op. 45
第1曲 悲しむ人々は、幸いである
第2曲 人は皆、草のようで
第3曲 主よ、知らせてください
第4曲 万軍の主よ、あなたの住まいは
第5曲 あなたがたにも、今は苦しみか
第6曲 地上に永続する都は
第7曲 主にあって死ぬ人は幸いである

※当初発表した出演者を一部変更しております。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人アフィニス文化財団
公益財団法人 花王 芸術・科学財団
公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

9/24 Sat.

第250回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.250 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/25 Sun.

第250回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.250 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

グリンカ
GLINKA

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

[休憩]
[Intermission]

リムスキー＝コルサコフ
RIMSKY-KORSAKOV

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

パヴェル・コレスニコフ -p.10
PAVEL KOLESNIKOV

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 [約5分] -p.21
"Ruslan and Lyudmila" Overture

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43 [約22分] -p.22
Rhapsody on a Theme of Paganini, op. 43

交響組曲〈シェエラザード〉作品35 [約42分] -p.23
Scheherazade, op. 35
I. 海とシンドバッドの船
II. カランダール王子の物語
III. 若い王子と王女
IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲

※当初発表した出演者を一部変更しております。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

9/28 Wed.

第6回 川崎マチネーシリーズ
ミューザ川崎シンフォニーホール 14時開演
KAWASAKI MATINÉE SERIES No.6 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

バッハ(ウェーベルン編)
BACH (arr. WEBERN)

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.7
MASATO SUZUKI

アレクサンドラ・ドヴガン -p.11
ALEXANDRA DOVGAN

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

〈音楽の捧げもの〉から
6声のリチェルカーレ [約8分] -p.25
Ricercar a 6 from "Musikalisches Opfer"

ピアノ協奏曲 第24番 八短調 K.491 [約31分] -p.26
Piano Concerto No. 24 in C minor, K. 491
I. Allegro
II. Larghetto
III. Allegretto

交響曲 第5番 八短調 作品67〈運命〉 [約31分] -p.27
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)

9/12
大阪定期

9/14
名曲

9/20
定期

9/24
土曜マチネー

9/25
日曜マチネー

Maestro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

名匠ヴァイグレが引き出す
壮大な管弦楽のサウンド



©読響

6月公演でも絶賛された常任指揮者ヴァイグレが、ブラームスの大作〈ドイツ・レクイエム〉のほか、R. シュトラウス〈英雄の生涯〉、リムスキー＝コルサコフの交響組曲〈シェエラザード〉を披露し、熱くドラマティックなサウンドを響かせる。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年にはフランクフルト歌劇場などで活躍し、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務める。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、15年、18年、20年には同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。21年にはメトロポリタン歌劇場でムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉を、今年7月にはミュンヘン・オペラ・フェスティバルでR. シュトラウス〈影のない女〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。これまでに、パイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。

読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR. シュトラウス〈サロメ〉(第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞)、今年7月のワーグナー〈パルジファル〉などで共演し、いずれも好評を博した。

指揮

鈴木優人
(指揮者／クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner

音楽界を切り開く
マサトが振る
鮮烈なる〈運命〉



©読響

^{はちめんるっぴ}
八面六臂の活躍で音楽界の未来を切り開く気鋭。バッハ、モーツァルト作品と並べてベートーヴェンの〈運命〉を指揮し、切れ味鋭いリズムで会場を熱狂へと誘う。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演。今年4月にはドイツ・ハンブルク響に客演し、5月にはグルック〈オルフェオとエウリディーチェ〉で新国立劇場に指揮者として初登場した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、活動は多岐にわたる。NHK-FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。齋藤秀雄メモリアル基金賞など受賞多数。昨年3月に芸術選奨文部科学大臣新人賞、今年1月に渡邊暁雄音楽基金音楽賞を受賞。20年4月より読響の指揮者／クリエイティブ・パートナーに就任し、多数公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュース。昨年11月にはオルガニストとしても出演した。九州大学客員教授。

9/28
川崎

Maestro

9/12
大阪定期

9/14
名曲

Artist



©Yuji Hori

ピアノ

辻井伸行

NOBUYUKI TSUJII, Piano

日本国内にとどまらず、世界を舞台に活動を展開するピアニスト。テレビなどにも多数出演し、国民的アーティストとして人気を博している。2009年、アメリカのヴァン・クライバーン国際コンクールで日本人として初優勝。05年のショパン国際コンクール・ポーランド批評家賞など受賞多数。アシュケナージ指揮ベルリン・ドイツ響やゲルギエフ指揮マリインスキー劇場管などとたびたび共演するほか、アメリカのカーネギーホールなど世界の一流ホールでリサイタルを開き、国際的に活躍している。日本でも読響をはじめとする国内主要楽団と共演するほか、ユロフスキ指揮ロンドン・フィルやペトレンコ指揮ロイヤル・リヴァプール・フィルなどと国内ツアーを行い、好評を博している。

9/20
定期

Artist

ドイツを拠点に欧州で活躍するソプラノの新星。ソウル出身。ミュンヘン音楽・演劇大学にて研鑽を積み、2014年エリザベート王妃国際コンクール優勝など数々のコンクールを制する。18年の平昌冬季オリンピック開会式で、オリンピック賛歌を歌い世界的な注目を浴びた。エッセンバッハ、シュテンツ、オラモら名匠の指揮でドレスデン国立歌劇場管、南西ドイツ放送響、SWR 響、BBC 響などと共演。オペラでは、ボン市立劇場、ハノーファー歌劇場、ヴィースバーデンのヘッセン州立歌劇場、ジュネーヴ大劇場でモーツァルト〈魔笛〉のパミーナ〈フィガロの結婚〉の伯爵夫人などを歌った。昨年はヴァイグレ指揮コペンハーゲン・フィルとの共演でR. シュトラウス〈4つの最後の歌〉を歌い、好評を博した。読響初登場。



©Oxana Guryanova

ソプラノ

ファン・スミ

SUMI HWANG, Soprano



©Simon Pauly

バリトン

大西宇宙

TAKAOKI ONISHI, Baritone

欧米の歌劇場や音楽祭で活躍を重ね、注目を集める若きバリトン。武蔵野音楽大学及び大学院、ジュリアード音楽院に学び、リチャ・アルバーネーゼ・プッチーニ国際声楽コンクールなどで優勝。シカゴ・リリック・オペラの所属歌手として多数の演目に出演し、ドミンゴやルネ・フレミングらと舞台を共にした。2019年セイジ・オザワ松本フェスティバルにてチャイコフスキー〈エフゲニー・オネーギン〉のタイトルロールを務め、日本でオペラデビュー。今年4月にはヒューストン・グランド・オペラにデビューし成功を収めた。ウィーン響、ニュルンベルク響などと共演。五島記念文化賞オペラ新人賞、日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞を受賞。10月に初CDシューマン「詩人の恋」(ピアノ：小林道夫)をBRAVO RECORDSよりリリース予定。

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、ショスタコーヴィチ〈バビヤール〉での見事な歌唱が絶賛を博した。

9/20
定期

Artist

9/20
定期

Artist

9/20
定期

Artist



合唱指揮

富平恭平

KYOEHI TOMIHIRA,
Chorusmaster

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけている。読響とは2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、19年の〈バビ・ヤール〉などで新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。



©Irina Schymchak

ピアノ

アレクサンドラ・ドヴガン

ALEXANDRA DOVGAN, Piano

巨匠ピノックやソコロフらが絶賛し、欧州の音楽界で注目を浴びる新星。2007年生まれ。5歳でモスクワ音楽院入学。クライネフ国際コンクールをはじめ数々の国際コンクールで入賞し、世界中に衝撃を与えてきた。18年、マリインスキー国際ピアノ音楽祭のオープニングを飾る。これまでにピノック、ドゥダメル、コープマン、大野和士ら著名な指揮者のもと、ザルツブルク・モーツァルテウム管、マーラー室内管、ストックホルム・フィル、バルセロナ響などと共演したほか、ベルリン・フィルハーモニーホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ザルツブルク音楽祭など欧州各地の殿堂で次々とデビューを果たし、メディアでも絶賛されている。今回初来日を果たし、読響初登場。

9/28
川崎

Artist

9/24
土曜マチネー

9/25
日曜マチネー

Artist

独創的な解釈と繊細かつ詩的な演奏を繰り広げ、欧米で注目を浴びる新星。カナダのホーネンス国際コンクールで優勝。ロンドンを拠点とし、BBC響、バーミンガム市響、ロンドン・フィル、ロシア・ナショナル管、トロント響などと共演。ハイペリオン・レーベルからCDをリリースし、高い評価を得ている。2014年ウィグモアホールでのリサイタル・デビューでは、ザ・テレグラフ紙から5つ星の評価を受け、「長いことロンドンで聴くことがなかった最も忘れがたいコンサートのひとつ」と絶賛された。20年のウィーン芸術週間などでは、世界のコンテンツポラリダンス界をリードするA.T.ドゥ・ケースマイケルに指名されて、J.S. バッハ〈ゴルトベルク変奏曲〉で共演し、大きな話題を呼んだ。読響初登場。



©Eva Vermandel

ピアノ

パヴェル・コレスニコフ

PAVEL KOLESNIKOV, Piano

レズニチェク

歌劇〈ドンナ・ディアナ〉序曲

9/12
大阪定期

9/14
名曲

Program Notes

エミール・ニコライ・フォン・レズニチェク（1860～1945）はウィーンに生まれ、家族の転居に伴いグラーツで法学と音楽を学んでから、ライプツィヒ音楽院を修了している。指揮者としてドイツ語圏の劇場を転々としたのち、87年以降はプラハに定住し、94年まで同地の歩兵連隊の軍楽隊長の任に当たった。

1902年にベルリンに居を定めてからは、45年に死去するまでの後半生を同地で暮らしたが、ナチスが政権を取った33年以降は複雑な生活を強いられた。2番目の妻ベルタはユダヤ系であり、また娘が反ナチスのレジスタンス活動を行うなどしていたが、自身は帝国音楽院総裁だったR. シュトラウスの勧めで作曲家国際協力常任評議会のドイツ代表に就任して、生活と活動の場を守った。戦火が迫る中、一時的にベルリンを離れたが、最後は同市で病没している。生涯に10作以上のオペラ、5曲の交響曲などを残したが、死後は本作〈ドンナ・ディアナ〉序曲がレパートリーに残る程度で、その創作の大部分は忘れられていた。近年、徐々にではあるが再評価が進んでいるようだ。

歌劇〈ドンナ・ディアナ〉はプラハの軍楽隊長だった1894年に書かれ、作曲家レズニチェクの出世作となった。バルセロナのプリンセスの恋のさや当てを描いた17世紀スペインの劇作家アグスティン・モレトの喜劇を、独訳版から作曲家自らが台本化した。

序曲は厳めしい^{いか}上行音型を木管とハープがおどけた感じでなぞる短い序奏を経て、「できるだけ敏捷に、軽く」と指示された16分の3拍子の主部に入る。ヴァイオリンとフルートがすぐに主要テーマを出し、ややあってヴァイオリンとヴィオラに幅の広い旋律が現れる。提示部反復を経て主要テーマが短く展開された後、木管が副旋律をしっとりと歌い上げるが、やがて冒頭のにぎやかさが戻ってくる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1894年／初演：1894年12月16日、プラハ／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、ハープ、弦五部

9/12
大阪定期

9/14
名曲

Program Notes

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第3番 八短調 作品37

ピアノ協奏曲第3番はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）の創作にとって一つの転機だっただけでなく、協奏曲というジャンルにおいても重要な意味を持つ。作曲過程については不明な点もあるが、最初の構想は1796年ごろにさかのぼり、1800年初めあたりには一旦完成していたようだが、1803年の初演で譜めくりを務めたザイフリートは、ソロのベートーヴェンの前に置かれた独奏譜の箇所には象形文字のような記号が書かれてあるほかはほとんど真っ白だったと述べており、独奏譜が完成したのは翌年のフェルディナント・リースによる再演に際してであった。

これはちょうどベートーヴェンが古典派のスタイルを脱して、作品ごとに独自のスタイルを追求し、いわゆる“傑作の森”へと入っていく時期に当たっている。熟考を経て生まれた第3番では、独奏は骨太の管弦楽と混然一体として溶け合い、規模を拡大しつつ深い情感を表している。また、ピアノの性能が急速に発展していたことも、ベートーヴェンの想像力を掻き立てただろう。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 暗い情念を秘めた第1主題を弦がユニゾンで歌いだす。クラリネットの明るい音色になぞられたのどかな第2主題の後、冒頭の気分が絶頂に達したところで、独奏ピアノが突き上げるように激しく入ってくる。主役の登場まで実に111小節と、規模の点でも破格である。

第2楽章 ラルゴ 清澄な和声に支えられたピアノの美しい歌を、ややあってオーケストラがなぞる。ピアノの分散和音の中をフルートとファゴットが夢幻の境地で揺蕩い、冒頭の主題が帰ってくる。

第3楽章 ロンド・アレグロ がつちりとした中にほの暗さを宿したロンド主題、付点音符で跳ねるように下行する第1副主題、クラリネットがリードする第2副主題。それらをピアノが華麗な技巧で繋いでいく。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1796～1803年／初演：1803年4月5日、ウィーン／演奏時間：約34分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

R. シュトラウス

交響詩〈英雄の生涯〉 作品40

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は初期に習作的な交響曲を書いた後、1880年代後半から90年代にかけて10年余りの間にシェイクスピア、ドイツの民話、ニーチェ、セルバンテスなど主に文学的なテーマに依拠した交響詩を次々と発表した。

〈英雄の生涯〉は7作に及ぶ一連の交響詩創作の最後を飾る作品だが、特定の文学的テキストやロマン派的な観念に拠るのではなく、近代における芸術家と社会の関係を、風刺や皮肉を利かせながら即物的に描いている。英雄や芸術家の描写はベートーヴェンの交響曲に始まり、ベルリオーズ〈幻想交響曲〉、ワーグナー〈マイスタージンガー〉に至る先例があるが、指揮者としても活躍していたR. シュトラウスは先人たちの仕事を踏まえながらも、それを様々な面で更新しようとしている。

まずは音響世界そのものの拡大。ヴァイオリンのソロをはじめソリストティックなフレーズが各所に現れる一方、編成を拡大して聴衆を圧倒する物量戦により、奥深い遠近感が追求されている。巨大オーケストラ上にモチーフをモザイク状に積み上げた絢爛たるサウンドは、他の追随を許さぬ職人芸だ。単一楽章ではあるが、各部には主題提示、スケルツォ、緩徐楽章、展開・再現といった構成上の役割が重ねられており、ストーリーと音楽形式が高度に結びつけられてもいる。

標題性の点から興味深いのは、「英雄」と言ってもロマン派的な英雄や孤高の芸術家のイメージとは距離があり、どこか覚めた目で戯画的に描かれている点だ。続いて作曲された〈家庭交響曲〉〈アルプス交響曲〉では自身のプライベートな体験により踏み込んでおり、長年望んでいたオペラでの成功を〈サロメ〉で手にすると、文学との関わりはオペラへとシフトしていく。20世紀に入りロマン派的な交響詩という器が時代にそぐわなくなってきたことを、R. シュトラウスのアンテナは敏感に掴んでいたのだろう。〈英雄の生涯〉はそうした点で創作の転換点を示すのみならず、世紀末という時代の区切りを画してもいるのである。

楽曲は大きく6つの場面から成るが、切れ目なく演奏される。“英雄”冒頭から幅広い音域にわたる勇壮な英雄の主題が提示され、フルートとヴァイオリンが展開する優美でなだらかなテーマが続く。この旋律はトリルなどによって華やか

9/12
大阪定期

9/14
名曲

Program Notes

に装飾されている。“英雄の敵”半音階で下行する木管楽器が不穏な空気を予兆し、チューバに平行5度の不気味なテーマが現れる。これは英雄の敵、すなわち評論家を表している。“英雄の伴侶”R. シュトラウスの妻パウリーネは優れたソプラノ歌手であった。ここではパウリーネの肖像を独奏ヴァイオリンで描いている。甘いフレーズを歌ったかと思えば、突然怒り狂ったりもして、その人柄がチャーミングにとらえられている。中低音域に現れる旋律が、夫婦の愛の対話を暗示する。“英雄の戦い”舞台裏からトランペットが鳴り響き、敵との本格的な戦いが始まる。軍楽隊の勇ましいリズムに乗って英雄が敵を蹴散らした後は、過去の作品からのモチーフが次々と引用され英雄の勝利を暗示する。“英雄の業績”交響詩〈死と変容〉〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉、歌劇〈グントラム〉など自作からのフレーズが次々と引用され、英雄は作曲家本人であったことが暗示される。“英雄の引退と完成”引き続き過去の引用をちりばめながら穏やかな結尾を導く。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1898年／初演：1899年3月3日、フランクフルト・アム・マイン／演奏時間：約45分
楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット5、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、銅鑼）、ハープ2、弦五部

〈英雄の生涯〉ソロ・ヴァイオリン

広島県呉市生まれ。東京芸術大学、ジュリアード音楽院で学ぶ。ヴェニツァフスキ国際コンクール（17歳以下）第3位、日本音楽コンクールに当時最年少で優勝。小澤征爾、岩城宏之、秋山和慶、ボッセらと共演。ソリストのほか室内楽奏者、各楽団の客演コンサートマスターとして活躍し、別府アルグリッチ国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、東京・春・音楽祭など各地の音楽祭にも出演。2006年から12年まで大阪フィル首席コンサートマスターを務めた後、14年から読響コンサートマスターを務める。

長原幸太
（読響コンサートマスター）

KOTA NAGAHARA,
Concertmaster



ダニエル・シュニーター

聖ヨハネの黙示録（日本初演）

ダニエル・シュニーター（1961～）はチューリヒに生まれ、ニューヨークを拠点に活動する音楽家。サクソフォンを吹き、作曲の筆をとる。作品の幅は実に広い。室内楽曲からオペラまで300曲ほどが作品リストに並ぶ。なかには中国、アラブ、アフリカの民俗的な素材を用いたもの、バロック音楽やジャズを下敷きにしたものもあり、音楽の造りの点でもその懐は深い。

シュニーターは2000年、アメリカのミルウォーキー交響楽団の委嘱により〈聖ヨハネの黙示録〉を書き上げる。作曲家は聖書の最終巻である預言の書を取り上げ、その内容をひとつづきのオラトリオとして組み立てた。

曲は途切れなく演奏されるが、詞章の内容に基づき、大きく3つの部分に分けて考えることができる。いずれの部分も「黙示録」の言葉を英語で収載すると同時に、それを補完する内容のラテン語の詩句を含む。

第1の部分は「黙示録」第1章から第8章までの内容を扱う。「この預言に耳を傾けるものは幸いだ。時は近いのだから」（第1章）とバリトンが歌った後、同じ章にある“ラッパのような声”を、ラテン語聖歌「怒りの日」、とりわけその「ラッパが不思議な音を響かせ」の句が肩代わりする。

第2の部分は「我らに災いあれ」（「哀歌」第5章16節）と叫ぶラテン語で始まる。「黙示録」第9章から第16章の内容がそれに続く。「天から星が落ちる」のを表す、一気呵成^{かせい}の下行音型など音画の技法も興味深い。災厄をもたらす「7つの怒りの鉢」（第16章）に相当するところでは、器楽のバロック風楽節が長く続く。

第3の部分は「黙示録」第20・21章を描き出す。「聖なる街、新しい天地」（第21章）の場面に入ると音楽はルンバ調に。詩句がラテン語の「テ・デウム」（汝を神と讃え）に変わってからほどなくして、二短調のピカルディ終止（同主長調の主和音での終止）による「アーメン」で曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2000年／初演：2001年2月8日、ミルウォーキー／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2、ピッコロ（アルトフルート持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4（フリューゲルホルン持替）、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロックンシュピール、ゴング、シンバル、サスペンデッドシンバル、ハイハットシンバル、トライアングル、ウッドブロック、ベルツリー、大太鼓、小太鼓、ハンドドラム、鐘、銅鑼、トムトム、タンブリン、カウベル、ハンマー、マリニバ、ヴィブラフォン、ウインドチャイム、鞭、レインスティック、フレクサトーン、スライドホイッスル）、チェレスタ、オルガン、弦五部、独唱（ソプラノ、バリトン）、合唱

ブラームス
ドイツ・レクイエム 作品45

1868年4月10日、ヨハネス・ブラームス（1833～97）は喝采の中にいた。ブレーメン大聖堂で〈ドイツ・レクイエム〉（第1～6曲）を初演し、大成功を収めたのだ。指揮台に立ち聴衆に答礼する作曲家の姿を見て、クララ・シューマンは亡夫ロベルトの言葉を思い出す。「（ブラームスが）合唱や管弦楽を鼓舞するように魔法の杖を振り下ろすと、私たちの前には精神世界の奥底を示す驚くべき光景が広がる」。クララはロベルトの予見の成就をこの日、目の当たりにした。

翌年2月18日、ライプツィヒでの全曲初演でも同じ光景が繰り返される。このため押しの成功でブラームスは、押しも押されもせぬ名声を築いた。単に優れた作品であるだけでは、これほど大きな成功は得られない。留意すべきは愛国主義とプロテスタンティズムである。

1862年、ビスマルクがプロイセンの宰相に就任。66年には普墺戦争が勃発、勝利したプロイセンがシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン地方を領土に組み入れる。その翌年、プロイセンはハノーファーやザクセンなどドイツ中北部の各領国を合同して、北ドイツ連邦を発足させた。

連邦地域の愛国心の高まりは著しく、その波は楽壇をも飲み込む。ドイツ人によるドイツ人のためのドイツ音楽が求められた。結果としてそれに呼応するかたちで世に現れたのが、ブラームスと〈ドイツ・レクイエム〉である。この作品が受け入れられる準備は、少なくとも北ドイツでは整っていた。

ブレーメンもライプツィヒも、この北ドイツ連邦の重要都市だ。加えて両者は、プロテスタント信仰を社会の基盤とすることで共通している。ブラームスの支持者ビルロートは、カトリック地域のウィーンで接した〈ドイツ・レクイエム〉の部分初演を、次のように述懐している。「彼のレクイエムはあまりにも（中略）プロテスタント＝バッハ的なので、ウィーンで成功するのは難しかった」。まさにそれゆえ、ブレーメンとライプツィヒでは、この上ない成功を手になることになる。

作品の造りの面からも、ビルロートの直感を裏付けることができる。ブラームスはこの曲を書くにあたり、ドイツ・バロック期の巨匠シュッツとバッハのプロテスタント教会音楽から、大いに着想を得た。〈ドイツ・レクイエム〉第4曲にはシュッツ

の〈息子よ、なにゆえお前は〉と同じ詞章をあて、第7曲には同じく〈主よ、汝はその僕を〉の詩を一部、利用している。また全曲を貫く旋律的素材は、バッハのカンタータ第27番や第93番に登場するルター派の讃美歌、〈ただ神の御旨に従うものは〉のメロディーを下敷きとする。

つまりブラームスは、シュッツやバッハの仕事を踏まえ、そのプロテスタント教会音楽の伝統の延長線上に、みずからの〈ドイツ・レクイエム〉を据えようと試みた。

第1曲「悲しむ人々は、幸いである」 冒頭、ヴィオラとチェロが讃美歌を下敷きとする旋律を奏でる。歌い出しの「幸いである」は、3度上行+順次上行の音型（ドミファ〔階名〕）。作曲家はこのモチーフの反行形（上下反転）や逆行形（左右反転）、さらに反行形の逆行形などを以後、作品全体にちりばめる。

第2曲「人は皆、草のようで」 曲調は葬送行進曲。「主の言葉は永遠に」から活気のあるフーガ。

第3曲「主よ、知らせてください」 独唱バリトンが教会旋法風のメロディーで歌い始める。「正しい人たちの魂は」から、長く続く主音上にフーガを展開する。

第4曲「万軍の主よ、あなたの住まいは」 合唱の歌い出しは第1曲の「幸い」音型を共有する。

第5曲「あなたがたにも、今は苦しみが」 独唱ソプラノが登場し、憂いと慰めを歌う。

第6曲「地上に永続する都は」 典礼レクイエムの「怒りの日」に相当する。独唱バリトンが死者の復活を告げるラッパに言及する。死に対する勝利を寿ぐフーガが続く。

第7曲「主にあって死ぬ人は幸いである」 第143小節の「幸いである」は第1曲の同詞章と同じ音型ながら、調が半音高い。死によって新しくされる、というプロテスタンティズムの芯に触れている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1865～68年／初演：1867年12月1日 ウィーン（第1～3曲）、68年4月10日 ブレーメン（第1～4、6、7曲）、69年2月18日 ライプツィヒ（全曲）／演奏時間：約68分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ2、オルガン、弦五部、独唱（ソプラノ、バリトン）、合唱

グリンカ

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲

9/24
土曜マチネー

9/25
日曜マチネー

Program Notes

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉は、〈皇帝に捧げた命〉(1836年初演)に続いて完成させたミハイル・グリンカ(1804～57)の2作目のオペラである。台本は、文豪アレクサンドル・プーシキン(1799～1837)の同名の長編物語詩をもとに、当初はプーシキンの協力が約束されていたが、彼が決闘で受けた傷がもとで急逝したため、シルコフらが共作で作成した。1836年に着想を得て、長い中断を経て書き上げられ、42年3月に総譜を帝室劇場に提出。同年12月に初演された。

物語の舞台は、古代ロシアのキエフ公国。悪魔にさらわれた大公の娘リュドミラの救出に3人の騎士が向かい、様々な困難を乗り越え、救出に成功したルスランと結ばれる、というもの。それに、求婚者である騎士たちの恋をめぐるエピソードや、善良な魔法使いと邪悪な魔法使いの登場などが絡む。登場人物が多く、筋立てが入り組み、前作の愛国的な英雄の悲劇のような分かりやすい展開ではないことが要因のひとつとなり、初演後、再演の機会は次第に減っていった。しかし、1860年代以降、グリンカの描写力の高い音楽が理解され、オペラも再評価された。彼の半音階や全音階を用いて魔法や幻想的なものを描く手法はロシアの伝統として確立され、グリンカはロシア的な東洋を音楽で表現した最初の作曲家となり、オリエンタリズムはボロディンの〈イーゴリ公〉やリムスキー＝コルサコフの〈シェエラザード〉に受け継がれるなど、19世紀後半以降のロシア音楽に大きな影響を与えた。

幕開けに演奏される序曲は、グリンカの作品のなかで最もよく演奏される曲である。楽曲(プレスト、二長調)は、^{さっそう}颯爽とした導入に続いて、力強い第1主題が示される。これは若い2人の婚礼の場面(第5幕)の音楽による。ヴィオラとチェロなどによる落ち着いた第2主題は、ルスランのアリア(第2幕)に基づく。この二つの主題を中心に勢いよく進められ、そのまま結びまで一気に駆け抜ける。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1842年(序曲)、1836～42年(歌劇)／初演：1842年12月9日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

9/24
土曜マチネー9/25
日曜マチネー

Program Notes

ラフマニノフ

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

セルгей・ラフマニノフ(1873~1943)は、1917年末に革命勃発で緊迫した祖国ロシアを離れ、スカンジナビア諸国を経て、翌年秋にアメリカに渡った。アメリカでは作曲家よりピアニストとして舞台に立つことが期待され、大きな手と長身から繰り出される力強い響き、溢れ出る豊かな表現力で聴衆を熱狂させた。そのため、移住後に書かれた作品はそれほど多くない。ピアノ協奏曲第4番(1926)で作曲を再開するも、以降は散発的に数曲発表するにとどまった。〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、その数少ない作品のひとつで、34年の夏にスイスのルツェルン湖畔の別荘で作曲された。ニコロ・パガニーニ(1782~1840)の無伴奏ヴァイオリンのための「24の奇想曲」第24番の主題をもとに、万華鏡のように様々な変化する24の変奏曲を書き、9小節の序奏とコーダを付した。

序奏(アレグロ・ヴィヴァーチェ、イ短調)に続いて、第1変奏→主題と順番を入れ替えて登場する。第7変奏(メノ・モッソ・テンポ・モデラート)では、独奏ピアノの荘重な和音でグレゴリオ聖歌の「怒りの日」の旋律が示される。「怒りの日」は、ラフマニノフの作品にしばしば現れ、この後も第10変奏や終結部ではっきりと浮かび上がる。第8変奏からパガニーニの主題とテンポが戻り、独奏ピアノも技巧的になり、第11変奏(モデラート)の情感豊かな表現と華麗なパッセージ、第12変奏(テンポ・ディ・メヌエット、ニ短調)の甘く切ない表情、と多彩な変奏が続く。

独奏ピアノのみで開始される華麗な第15変奏(ピウ・ヴィーヴォ、スケルツァンド、ヘ長調)、変口短調の第16変奏をはさみ、有名な第18変奏(アンダンテ・カンタービレ、変ニ長調)では甘美な憧れに満ちた旋律が歌われる。最も長大な第22変奏(ウン・ポコ・ピウ・ヴィーヴォ、イ短調)の後は、華やかなコーダに向けて力強く突き進み、「怒りの日」が壮大に響くものの、最後は静かに曲を閉じる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1934年／初演：1934年11月7日、ボルティモア／演奏時間：約22分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル)、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

リムスキー＝コルサコフ

交響組曲〈シェエラザード〉作品35

軍人貴族の家系に生まれたニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844~1908)は、海軍軍人として働きながらロシアの国民楽派「五人組」の一員となり創作を続けた。専門的な音楽教育は受けていないが、管弦楽法の大家としてロシア内外の作曲家に多大な影響を与えた。その手腕は編曲等でも発揮され、ムソルグスキーの交響詩〈はげ山の一夜〉のオーケストレーションや歌劇〈ホヴァンチナ〉の補筆をし、ボロディンの未完の歌劇〈イーゴリ公〉もグラズノフと一緒に完成させた。

こうした作業を通じて、新たな作品のアイディアを得ることもあった。1888年に作曲された交響組曲〈シェエラザード〉は、〈イーゴリ公〉の補筆作業を手がけるなかで着想された。どちらも東洋風の異国情緒に溢れ、雄大さと力強さが広がり、両作品の主題の共通性を指摘する音楽学者もいる。リムスキー＝コルサコフは、『千夜一夜物語(アラビアン・ナイト)』を題材に、「女性に不信の念を抱くシャリール王は、毎夜、女性と一夜を共にしては翌朝、殺害してきた。新しく妃になるシェエラザードは、千一夜の間、不思議な物語を聞かせ続け、王に残忍な考えを捨てさせた」という全体の構想を立てた。そして、初演の際に作曲者が楽団員に説明した内容などから、それぞれ第1楽章「海とシンドバットの船」、第2楽章「カランダール王子の物語」、第3楽章「若い王子と王女」、第4楽章「バグダットの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破」といったタイトルをもつと考えられている。

音楽は、2管編成にもかかわらず、見事なオーケストレーションで絢爛豪華に鳴り響く。第1楽章のシャリール王とシェエラザードの主題は、循環主題として各楽章に現れ、第1楽章と終楽章の海の描写には、海軍時代の経験が生かされた。

第1楽章 ラルゴ・エ・マエストーソ 荒々しい響きのシャリール王の主題で始まり、続いて独奏ヴァイオリンが優美なシェエラザードの主題を奏でる。主部(アレグロ・ノン・トロppo)は、波打つ海の様子が描かれ、フルートによるシンドバットの主題が現れる。海は大きくうねりをあげ、シャリール王やシェエラザードの主題も現れる。

第2楽章 レント 冒頭の独奏ヴァイオリンのシェエラザードの主題が、新たな物語の開始を伝える。カランダール王子の主題(アンダンティーノ)は、ファゴットで

9/24
土曜マチネー9/25
日曜マチネー

Program Notes

9/24

土曜マチネー

9/25

日曜マチネー

Program Notes

滑稽な表情を見せながら示される。金管楽器の鋭いファンファーレ（アレグロ・モルト）で緊迫感が増すが、やがてカランダール王子の主題とともに陽気な音楽が戻ってくる。

第3楽章 アンダンティーノ・クワジ・アレグレット 若い王子と王女の夢見るようなロマンティックな音楽。主部は弦楽器が官能的な美しい旋律を歌い、中間部は小太鼓のリズムにのせてクラリネットが快活な主題を示す。作曲者によれば、後半は独奏ヴァイオリンのための楽章で、華やかな技巧が披露される。

第4楽章 アレグロ・モルト シャリアル王の主題が戻り、シェエラザードの主題が続く。賑やかな祭りの様子が描かれ、これまでの楽章の主題が回想される。第1楽章の海の情景が再現され、嵐に襲われ船は難破する。最後は、優しく語りかけるシェエラザードの主題にシャリアル王の主題が重なり、締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、銅鑼）、ハープ、弦五部

〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

ウィーン国立音楽大学卒業、同修士課程を最優秀で修了。ブレスラ国際コンクール日本人初優勝のほか受賞歴多数。チリ国立響、パドヴァ・ヴェネト管などと共演し、欧州やアジア各地でソロや室内楽で活躍。2012年から14年までノルトライン・ヴェストファーレン州立ノイエ・フィルの第1コンサートマスター、14年から17年までハノーファー北ドイツ放送フィルの副コンサートマスター、17年から21年までヴッパータール響の第1コンサートマスターを務めた。21年4月から読響のコンサートマスターを務める。

林 悠介

（読響コンサートマスター）

YUSUKE HAYASHI,
Concertmaster



©読響

バッハ（ウェーベルン編）

〈音楽の捧げもの〉から6声のリチェルカーレ

往年のラジオ・リスナーには、この曲をNHK-FM「現代の音楽」の番組テーマ曲として懐かしく思い出す方も少なくないのでは。原曲はヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）の傑作〈音楽の捧げもの〉。1747年、バッハがプロイセンのフリードリヒ大王に招かれた際、大王から与えられた主題で見事な即興演奏を披露したという逸話がある。バッハはその後、王の主題をもとに対位法を駆使した曲集〈音楽の捧げもの〉を仕上げ、これを大王に献呈した。

その中の一曲が〈6声のリチェルカーレ〉。「リチェルカーレ」という言葉の本来の語義は「探し出す」。時代によりさまざまな意味で用いられる言葉だが、ここではフーガのことを指している。バッハは大王の主題を用いて6声のフーガを即興で演奏するように王から求められたが、その場では果たせず、代わりに自作主題による6声のフーガを披露した。後日、改めてバッハは王の主題による6声のフーガを書きあげて、これを〈6声のリチェルカーレ〉として〈音楽の捧げもの〉に組み込んだ。原曲に楽器指定はないが、今日ではチェンバロ独奏で演奏されることが多い。ちなみに大王の主題はハ短調。本日はハ短調ばかりのプログラムなのだ。

そして、新ウィーン楽派の作曲家として知られるアントン・ウェーベルン（1883～1945）は、この作品を独創的な方法でオーケストラ用に編曲した。フレーズが細かく分割され、それぞれに異なる楽器が割り当てられているのだ。冒頭の王の主題は主に金管楽器が担当し、最初の5音がトロンボーンで、続く2音がホルン、その次の2音がトランペットで演奏される。その応答は木管楽器が中心で、フルート、クラリネット、オーボエ……といったように受け渡される。主題と応答は登場ごとに楽器を変え、頻繁な音色の変化が原曲にさらなる精妙さと立体感を付加している。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1934～35年／初演：1935年4月25日、ロンドン／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、バスクラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、ハープ、弦五部

9/28

川崎

Program Notes

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第24番 八短調 K.491

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の作品のほとんどは長調で書かれている。短調の曲はごくわずか。全作品中どれくらいの割合で短調の曲があるのか、厳密にカウントするのは意外と難儀なのだが、ざっくりとした概算として作品一覧を表計算ソフトに貼り付けて算出すると、およそ8パーセントの作品が短調で書かれている。ピアノ協奏曲に限れば全27曲中、この第24番八短調と第20番二短調の2曲が短調作品。やはり短調の曲は1割未満といったところだ。そして、数は少ないものの、なぜかこれら短調作品には屈指の傑作がそろそろ。渦巻く暗い情熱と緊迫感あふれるドラマティックな性格は、長調作品における晴れやかで祝祭的な雰囲気とは対照的で、モーツァルトの秘められたもうひとつの顔を見せてくれる。

第1楽章 アレグロ 地を這うようなファゴットと弦楽器により異様なムードで開始される。主題はどこか不安定で、フレーズの終わりの跳躍が特徴的。クラリネットもオーボエも含んだ当時としては大編成のオーケストラが分厚い響きを作り出し、独奏ピアノと力強い対話をくりひろげる。終結部の前にカデンツァが挿入されるが、作曲者自身の作は残っていない。

第2楽章 ラルゲット 前楽章の張りつめた緊張から解放され、穏やかで淡々とした主題が奏でられ、寂寞とした^{せきばく}気配を漂わせる。独奏ピアノに加えて、木管楽器群のアンサンブルも聴きどころ。

第3楽章 アレグレット 忍び寄るような主題で開始され、静かな緊張感を醸し出す。主題が次々と変奏されてさまざまな表情を描き出す。ひなびたディヴェルティメント風や勇ましい行進曲風等の変奏を経て、最後はいくぶん空虚な表情を見せながら唐突に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1786年／初演：1786年4月7日、ウィーン／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

交響曲 第5番 八短調 作品67〈運命〉

なぜこの曲が「運命」と呼ばれるかといえば、冒頭の「ジャジャジャジャー！」（運命の動機）について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が「運命はこのように扉を叩く」と語ったから……と古くから言われてきたのだが、近年この逸話は人気がない。この証言を伝えた作曲者の秘書シンドラはたびたびウソをついた信用できない人物であり、逸話の^{しんびょう}信憑性は低いとみなされているからだ。もちろん、ウソつきの言うことがすべてウソとは限らないので、本当に運命が扉を叩いている可能性も否定できないのだが。

実は「運命の動機」については別の証言もある。ベートーヴェンの弟子ツェルニー（ピアノ教本で有名だ）によれば、これはキアオジなる鳥の鳴き声に由来するというのだ。キアオジは日本ではなじみの薄い鳥だが、インターネットで動画検索すればすぐに鳴き声わかる。「チチチチー」というよりは「チチチチチ、ツィー」といった鳴き声だが、たしかに「運命の動機」によく似ている。野鳥図鑑によればキアオジは「ハンマーで叩くようなリズムで鳴く」。シンドラ説もツェルニー説も「なにかを叩いている」という点では意見が一致している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 「運命の動機」で開始され、緊迫感あふれる楽想が展開される。「運命の動機」は全曲にわたり支配的な役割を果たす。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 通例ではゆっくりとした楽章が置かれる第2楽章だが、作曲者の指示は「コン・モート＝動きをつけて」。変奏曲形式。

第3楽章 アレグロ スケルツォ楽章。うごめくような低音に導かれて、ホルンが「運命の動機」に基づく主題を奏でる。切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章 アレグロ 勝利を思わせる主題が高らかに鳴り響き、高揚感をみなぎらせる。苦悩から勝利へと至る超克のドラマが完結する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部